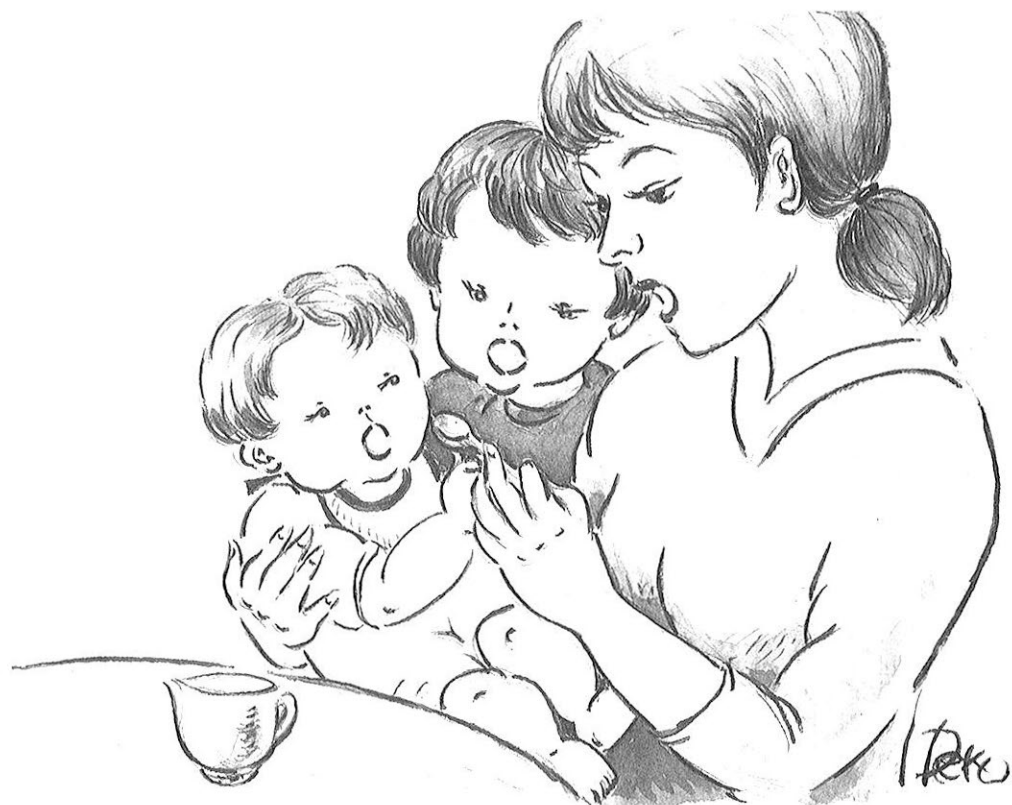


ひかりのこ

光の子



No.115 2005.11.1



「ハイ、お口、アーン……」

挿絵・中島英子

「終戦日」

腹這ひに本読んでをり終戦日

鑑真忌波のひとつが巖を越え

流灯のつつかへてゐるひとところ

土用三郎茶柱を立たせけり

防人の山のかなかなしぐれかな

湯上りの香の中にあて遠花火

向う鉤ひびかせて秋深みけり

黛 まどか

(『ヘップバーン』主宰)

おり、実に嫌な思いもしているが、これで良かったのだと思っている。こんな状況で仕事を残したままの出勤となり、メールやら国際携帯電話やらで追いかける羽目

学者もどきのつぶやき ⑥7

ミケランジェロの「最後の審判」

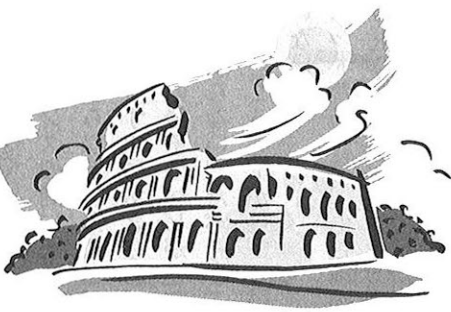
山形大学 学長 仙道 富太郎

八月十六日から一〇日間ヨーロッパ観光旅行に出かけた。三男坊がベルギーのブリュッセルに赴任しており、赴任中に一緒にヨーロッパ旅行をすることを約束していた。実は、八月三十一日で学長の任期が

終わるので、この時期はほとんど仕事がないと踏んでいたのである。結果的には、すったもんだのあけく、学長選挙に再出馬することになり、十七票差という僅差で相手候補に勝ち、学長に再選された。色々と悶着があり、いまもそれは続いており、実に嫌な思いもしているが、これで良かったのだと思っ

ていた。八月十六日から一〇日間ヨーロッパ観光旅行に出かけた。三男坊がベルギーのブリュッセルに赴任しており、赴任中に一緒にヨーロッパ旅行をすることを約束していた。実は、八月三十一日で学長の任期が

終わるので、この時期はほとんど仕事がないと踏んでいた。結果的には、すったもんだのあけく、学長選挙に再出馬することになり、十七票差で相手候補に勝ち、学長に再選された。色々と悶着があり、いまもそれは続いており、実に嫌な思いもしているが、これで良かったのだと思っ



渡部かずき君を偲び悼む

— 3 回日の記念日に —

施設長 菅原 哲男



去る九月五日、二年前の交通事故がきっかけで死に至った渡部かずき君の三回目の記念会を、身内だけで催すこととして準備をした。他の人たちに迷惑をおかけすることを避けたかったことと、これからこの日をどのように迎えて過ごすのかを、落ち着いて考えてみたかったからであ

きた。はたして、私たちの思いの外にこんなにも多くの人々を動かし、そして光の子どもの家の子どもたちがこの地域で孤立してはいないことを力強く確認させられたのであった。一昨年、京都府立大学の津崎哲雄教授から、「かずき君は死んで成長しないわけではない。天国できつと成長を続けているに違いない。」と弔意をいただいた。

また、いのちは一回限りであることでもある。中断などすることのない連続した一回限りがいのちなのである。そして、今生きているがいつそれが終わるかは誰も知らない。いつそれが来ても良いような生き方や暮らしが死を克服して生きることなのだろうか。

ヤーを受け続けていた小四だった子ども達が、今年で三十歳になるという時の重みをしみじみ考えさせられる二十一年目の春です」と書かれています。子ども達は

続・トムソーヤ達の朝

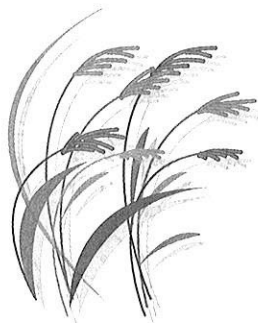
日本キリスト教団東大宮教会 永野 三恵

「光の子」一
一四号で職員
の岩崎まり子
さんが「開設
当初、長男と
いうプレッシ

「おはよう。」「おはようござい
ます。」日曜日の朝、元気の良い子
ども達の明るい声と共に、教会が
活気をおびてくる。

東大宮教会の朝は十余年の歳月
が流れても変
わらない。

今回、バー
ガー京子さん
の連載が終わ
るにあたり、
十年前に「ト
ムソーヤ達の
朝」の雑文を
記していた縁
により、菅原
さんよりピン
チヒッターと
して立たされ
た。

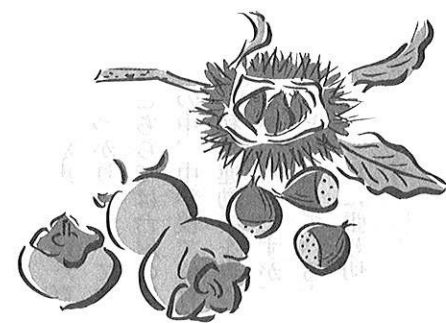


様々な足跡を残しながら、もう社
会人として働き、頼もしい青年に
なっているのだ。
あの当時、思春期真っ只中にあ
った彼等は、荒々しくまた愚直に
感情を職員や周囲の大人にぶつけ
てきた。彼等の激しい揺れに、私
達は心を痛め、祈ることしかでき
なかった。そんな彼等が、優しい
笑顔と共にフラッと教会の礼拝に
姿を見せてくれる。その様な何年
ぶりのか出会いは、当時の様子を
知っていた私にとっては何よりの
喜びとなる。

この夏、思いもかけない大きな
プレゼントが一本の電話と共に我
が家に届いた。
「あー俺。今、会社の出張で北海
道にきているから、こっちのうま
いもの送るから」と。
教会学校で出会い関わりが始ま
ったO君からだった。O君とは随
分いろいろなことがあったなと
しみじみ思わされた。その時の経



現在、教会で出会っている三六
名のトムソーヤ達。腕白盛りで、



何か面白いものがないかといつも
探し続けている。十年前に比べ、
もっと重い状況の中で傷つき光の
子どもの家へやってきた彼等。
だが、私は確信している。職員
に抱きしめられ、笑顔で語りかけ
られ、迎え入れられている毎日の
生活。その中で愛されている実感
と共に、人への信頼感が育まれて
いることを。
願わくば彼等が、一週間に一時
間という短い教会学校の礼拝を通
し、神様の大きな恵みと慈しみの
中に育まれている実感の中で成長
してほしいと。

エッセイ

猫たちの周辺

猫はおもしろい。
一緒に生活してみると、犬とは
違ったいろいろな性格や行動が、
人間を困らせたり、怒らせたり喜
ばせたり、癒してくれたりするも
のだ。

猫と人間とのつき合いの歴史は、
恐らく人類の誕生以来ということ
かも知れない。

古代エジプトの彫刻に見られる
猫は、その当時それぞれの家で飼
われていた猫の形をしてはいるが、
実は神として崇められていたとい
う。もち論そのような要素を抜き
にして、純粹に彫刻として見た場
合でも、その造形的な美しさは、
現代人の心を十分に揺り動かし、
感動を与えるものがある。

首には立派な黄金の首飾りをつ
け、頭には永遠を象徴すると言わ
れる宝石のようなものをつけて座
っている猫は、素晴らしい神像で
ある。

私の知り合いの中にも、猫の彫
刻を作る人が何人かいる。その人
たちも、恐らく制作の出発的で、
或いは制作のプロセスの或る時期

において、古代エジプトの猫を意
識しないで通った人はいないであ
ろう。それくらい「猫」と言った
ら古代エジプトの猫なのである。

しかし、現代の日本人である私
の友だちは、その制作の基本にお
いて古代エジプト人たちは、猫
に対する意識が全く違う筈だから
猫の姿を神として作ってはいない
であろう。身のまわりに共に生き
る好ましい動物として、或いはや
つかいだが必要な存在として作っ
ているのではなからうか。

したがって、宗教的、品に溢れ
た、神秘的な猫でなく、寝そべっ
てみたり、二、三匹でじゃれ合っ
たりといった日常的な、普通の猫
を、親しみをこめて愛情深く作っ
ている。

ところで、現実の生活の中の
猫とのつき合いは、なかなか単純
にはいかない。

私の家では今、三毛のメス猫一
匹と、黒いシッポの長いオス、黒
ブチのオスと計三匹が同居してい
る。

三匹とも正式な名前はない。母

親の三毛には「ママニャン」と呼
んだり「オカアチャン」と呼んだ
りしている。最近、孫が来て「ネ
コちゃん」と呼んだり「マリコチ
ャン」と呼んだりした。どんな理
由で「マリコちゃん」なのかわか
らないが、私どもも「マリコチャ
ン」と呼ぶこともあるが、「ママ
ニャン」が呼びやすい。どちらに
しても、いい加減なものである。
すっかり成長した「クロ」と「ブ
チ」に対して、「ママニャン」は
やはり母親としての貫禄と愛情を
時々見せる。外出から帰る時に、
何かおみやげを持って来るのであ
る。ニャーゴニャーゴと独特な鳴
き声がすると、「クロ」と「ブチ」
はすぐかけて行って母親を出迎え
る。しかし、そのおみやげが、子
どもたちにとってどんなに嬉しい
ものであっても、同居人の我々に
は必ずしも好ましいのではない。
或る時、二十五センチぐらいのヘ
ビをくわえてきたことがある。猫
たちは、この可愛らしいヘビを食
べるのではなく、みんなでいたぶ
った上で部屋の中に置きっぱなし
にするのである。だから見つけ次
第、チリトリに箒で取りこんで、
猫につかまらないように放してや
る、ということになる。ところが

「ママニャン」のみやげの小さな
ヘビが、壁とタンスの間に入って
しまつてつかまらなかったことが
ある。猫たちもすぐにあきらめて
しまった。その後そのヘビがどう
なったかわからない。たぶんどこ
か見えないところで干からびてい
るに違いない。

私のベッドのわきで、小さい綿
ぼこりの玉のようなものを見つけ
たことがある。つかまえてみると、
何とそれは小さな蛙であつた。「マ
マニャン」につかまつて部屋まで
運ばれてきて、うまく逃げだして
ベッドの下にかくれたまでは良か
つたが、右に左に動くたびに、体
中に綿ぼこりを巻きつけてしまい、
ほこりの玉のようになって力つき、
干からびてしまったのだらう。足
をのばして堅くなつてしまった蛙
を、私は窓から雑草の繁っている
あたりに投げてやった。いずれ自
然に還るのである。少なくとも、
燃えるゴミの中に投げ入れるのは
避けた。

あの小さな生命をつかまえてき
た猫には、何の悪意もなく、自然
な行動なのだが、人間は多少立場
が違うので、そうする事が短命だ
つたあの蛙に対する礼儀かな、と
も思う。

あかり窓

心理室から

急に寒さを感じる季節になりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

年度の中盤にさしかかり、今年も中学生も高校生も三年生は進路選択に悩む時期にさしかかっています。高三の詩美ちゃんはその筆頭にあり、いろいろな思いに混乱・憔悴している状態で、見ていて気の毒に思ってしまうほどです。

法律上、子どもたちは十八歳までしか児童養護施設に身をおけません。価値観が多様化し、ニートが現代社会の象徴のようになっている中においても、ここにいる子どもたちは高校卒業という一律の期限をもって自立を迫られ、その後の社会的支援はほとんどありません。乳児院と児童養護施設の年齢枠に幅をもたせた児童福祉法改正がなされたばかりですが、自立に向けても子どもたちそれぞれ事情に合わせた支援ができる社会になることを願います。

積 みどり

子どもたちの季節

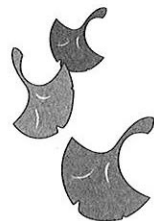
仙道家

秋色の高い空を赤とんぼが気持ちよさそうにスーと飛んでいきます。

そんな空を見ながら夏休みは楽しかったなと思ひ返します。子どもたちもそうかな？

夏休みが始まって間もなく小学校一、二年生が谷本先生のご厚意により、長野県の阿登久良山荘へ。我が家から高村兄妹が参加。兄の潤は転がりながら、妹の綾は黙々と山に登りました。その一団が帰宅してから阿登久良山荘へ行きました。理名、朋美、泰志が参加。そして、八月に入ると幼児が指導員根本の実家のご厚意で茨城県の海へ。小野姉妹、美咲の三名が参加。姉の美貴はぶかぶか海に浮かび、妹の美歩は怖がって海には入れず、岩場でカニ捕りに熱中していました。美咲はマイペースで楽しんでいました。

八月も中旬に入ると高一の香奈、



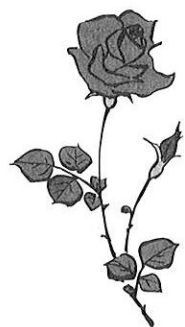
池田 祐子

中二の龍治、小五の潤、とポツポツ家族の元へ帰省し始めました。この夏、家族の元へ帰省できない子どもたちは施設長菅原のお知り合いである府川様のご厚意により、神奈川県海へ行きました。ところが、一緒に行くはずだった小野姉妹が揃いも揃って熱を出して体調を崩してしまい担当の牧野ともども留守番となっていました。

うしろ髪引かれる思いで、子ども五名、大人四名の計九名は車で出発しました。三泊四日の神奈川県湯河原町での生活は楽しく、子どもたちは毎日海に入り、ボディボードを楽しんだり、波をかぶってひっくり返ったり、浜辺で砂遊びや貝拾いに興じたりして、夜、布団に入ってから波に揺られるようで不思議な気持ちで眠りにつきました。

たくさんの楽しみの合間に宿題もやって、夏休みはあつという間に過ぎました。

多くの方々のお世話になり今年も子どもたちは、思い出を豊かにすることができました。



遠藤 めぐみ

季節のおとずれ

市川家

めっきり秋めいて参りましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

長かった夏休みも終わり、学校のある生活が始まっています。

とってもかわいい双子の兄妹で弟のようなお兄ちゃんの要くんとお姉ちゃんのような妹の美也子ちゃんがよく喧嘩をしますがとても仲のいい兄妹です。

とってもマイペースな要くんは、一学期は他の子のペースについていけず、ゆつくりのペースで頑張っていました。宿題を出されても問題の意味がわからず、なかなか答えられずにいました。夏休みに手を使わずに十までの数の足し算、引き算ができるようになるという宿題も、なかなかできず私は内心焦っていました。要くんなりに努力しているのに、その姿には目を向けず、できていない所ばかりに気づいてしまっていました。

二学期に入り、学習内容は一気に難しくなり、とても心配していたのですが、要くんは自分のペースで着実に身に付けており、つい先日帰って帰ってきた算数のテストは何と九十点！「すごいねー。やったね」と褒めると本人は「えっ」という感

じでしたが、私はとても嬉しかったのです。子どもの成長、努力に感動してしまいました。小さいことですが、きつとこの子はできる。やれる」と信じる気持ちの大切さを改めて強く感じました。

これからも、小さな輝きを見逃さず、毎日の生活を大切にしたいと思っています。

市川 美穂

光の中で

佐藤家

この夏、恒例となりました秋田旅行へ今回は子ども六名大人三名、総勢九名で行ってまいりました。当日は昼頃着き、昼食を済ませた後、車で五分ほどのところにある牧場に行き、柵を乗り越え、誰もいない（牛も）だっ広い牧草地をひたすら走りまわりました。必死に付いてくる子ども達は、水をかぶったかの様に汗を流していました。少し休むと、何にも遮られることなく吹く風が、また走る力を与えてくれました。目的も意味もなく、気の向くままにただ走る。「あーこれいいんだ」……この五日間、どうやって子ども達に良い時間を過ごしてもらおうか、などとお出発前から難しく考えていた自分が懐かしいっ!!そんなスタートを切った今回の旅行は天気にも恵まれ、子ども

達の笑顔が絶えない楽しい時間となりました。

特に海水浴では、この旅行を心待ちにしていた中学生の海野兄弟にとつて、忘れられない思い出になっただろう。また、足のとどかない沖まで連れて行かれ泣き叫んでいた四人の小学生達も、その事が心に強く刻まれ忘れられない思い出となり、後にこの儀式？を受け継いでいってくれることでしょう。

楽しく安全な五日間を陰で支えてくださった皆様に感謝します。

小西 剛史



河のほとり

倉澤家

毎日元気良く幼稚園に通い、幼稚園生活を楽しくしている五歳の成繁。朝幼稚園に送った時には、門が見えたと担当者となっていた手をパツと離し、園の玄関に向かってまっしぐら。後を振り返ることさえしませんでした。登園を嫌がるよりはずっとあり

原田家日記

子ども達の元気な声が響いた夏が過ぎ、辺りもすっかり秋めいて参りました。先日こちらでは台風の影響で激しい風雨の中、中学校で体育祭がありました。私は運動会を見に行くことはできなかったのですが、聞くところによると担当している中二の俊哉が別人と思う程に張り切って頑張っていたようです。

普段は家の中の彼しか見ていないので、「いつもダラダラして！」なんて怒ってばかりいますが、子どもたちはこちらの見ていないところでいつも頑張っているのだと思い、何だかとても嬉しくなりました。子どもを前にするといくうるさくなってしまうがちですが、学校から帰ってくる子どもたちが心も身体も休められる家を作っていけるよう、努力していきたいと思っています。

遠藤 めぐみ

がたいのですが、担当者としては少し寂しい思いもしていました。しかし、お迎えの時は朝とは違い、担当者の顔を見るとすぐに帰る準備を始め走って来てくれます。そして、「あーママだ。」「ママー」「ママ。ママ。」を連発します。これまでも担当者を「ママ。」と呼ぶことはありましたが、最近特に目立つようになってきました。幼稚園という社会の中で、「家族」、その中でも特に「母親」の存在が彼の中で大きく育ってきたのでしょう。

夏休み中に外出した先々でも、担当者のことを「ママ。」と連呼。何か用があるわけではないのですが、「ママ。手をどうぞ。」「ママ、ちょっと話があるんだけど……。」以前は、「成繁のママじゃないでしょ！美喜のママだよ！」と怒っていた娘も、まあ仕方ないかーと思えるように成長したのか文句を言うことはなくなりました。

「ママ。」と呼ばせることだけでなく「家族」に代わることはできませんが、彼が呼びたい時に呼びたいだけ呼ばせてあげたいと思っています。そして、彼が自立するまでには、呼び名はどうであれ、「家族」に代わる者になったいと思っています。

倉澤 智子

家族に関わる その8

菅原 哲男

珠恵は、中学でやや落ち着いた生活が出来てはいたのだが、時折部活などでうまくできなかったりすると他の部員に八つ当たりのような乱暴をはたしたり、ふざけが過ぎてケンカになったり、表現が出てきては、学校に駆けつけ、関係の教師たちと協議しながらもう一つのヤマも越えようとしていた。そんなある日、私たちは祖父母宅を訪ねた。

珠恵に拒絶されて帰って行った後で、電話をして取りなしてはいたが、子どもたちにとって数少ないプラスの関わりが期待できる人的資源でもあり、光の子どもの家の方針などをよく説明し、持っているであろう不安を取り除くことや、私たちへの要望などを聞き取り今後の協力や関わり方などを確認することが目的であった。

ここで、訪問や面談の「目的」についてであるが、あまりきつちりとしたものにしておかない方がよいことが多い。

私たちは入所などの時に「遠い親戚」のようになることを提案している。この国で、自分の子どもを自分以外の人の家に預けて育ててもらおうという

ことは、多くの場合きょうだいや祖父母、叔父叔母など親戚のところに頼むことが圧倒的に多くそして自然なことなのであった。

そうすると、我が国の社会的に保護し養育した方がよいだろうと考えられる子どもたちの発生率はほぼ同じ状況であろう。

そう考えると、我が国の保護を要する子どもたちの多くは施設からはみ出し、親戚などに預けられていて、施設を利用する子どもたちは極度に困難な負因を持っている者に限られるだろうことに帰結するのである。

さて、話を戻そう。遠い親戚になろうという呼びかけは、我が国の児童養護施設を利用する大人たちへの呼びかけとしては理解を得やすいことにもなるのである。

そして、何気なく立ち寄ってもいいことを私たちはもう少し確かめておいた方がよいと思われる。

自分が自分の子どもを誰かに預けてほんの少しでも世話をかけるようなことになった場合、預かってもらった者が立ち寄ったら何か情報でも得られるのではないかと期待もするのではないだろうか。

仮に家の前を通っても立ち寄ってももらえなかった場合を考えると、それ

は言い表しがたい引け目や負い目を感じるのではないだろうか。

そんなところからも、「目的意識」はあまり重要なものではないのである。

逆に目的意識に縛られて自然なやりとりがしにくくなったりもする。

元々、人間関係が目的や計画通りに展開することなど考えられないはずである。

私たちは東京下町の祖父母宅を訪ねた。

古い乾物屋を営む祖父は見るからに勝ち気で、はきはきした物言いだった。祖母はそんな祖父とは対照的に話は聞いてはいるが結界を置いているように、ほんの少しの距離を保ち続けていて、話にはきかれた時以外に入ることにはなかった。

実母にはふたりの姉がいて、それぞれに嫁ぎ子をなして暮らしているという。末子の実母は、最初の結婚で二人の子を授かりながら何とか暮らしていたという。

そして、珠恵も妹の俊子も生まれた時から働いている両親に代わり殆どその養育を引き受けてきていたと、そのころを懐かしむように話した。

現場から

続・光の子らしく

⑬

岩崎 まり子

桜やけやき、朴の木が、一足早く落葉し始め、庭の風景は夏から一気に秋になっていきます。皆様、いかがお過ごしですか。

稲の刈り入れも終わる頃、子どもたちの通う小・中学校は運動会の季節です。それぞれ一年前の姿と重なり、成長を実感させられました。

一年前は幼稚園生だった丘実ちゃんは今、競技の合間の待ち時間が苦手で、ウロウロしたりケンカをしたり、先生や友だちに注意されてばかりでした。それが今年は、保護者席に来てしまうことも二回くらいしかなく、徒競走で走る姿もなかなか格好良くなり驚いてしまいました。念願のリレーの選手になった里奈

ちゃんは、勝ち獲ったその栄光に大喜び。しかも

「抜かすよ。」

と、たくましさも輝くばかりでした。そして、中学三年生の省二君。体育祭の前は、土曜も日曜もなく学校で準備に明け暮れてやる気も十分。中学最後の体育祭に賭けていました。

中でも、組体操の中の四段タワーは名物です。三年生男子だけが挑戦する資格があり、毎年、タワーの数だけドラマが生まれます。

一番下で皆を支える八人が円陣を組み、彼らの肩に次の四人がまた円陣を組み、更にその肩に二人、そして頂点に一人。どれ程の重さか、期待と不安が、その肩にぐいぐい伝えている。

るか知れません。そして下の段の円陣から順番に曲げていた腰を、ひざを少しづつ伸ばし立ち上がっていくのです。たった一人がバランスを崩すだけで、タワー全体が崩れてしま

う。だからこそ、皆で立ち上がったときの感動は……。下級生たちは、自分たちも三年生になったらあそこ立つんだと、皆それをイメージして身震いするのでしょうか。誰も決して補助としてあ場に居る自分は、イメージしないのではないのでしょうか。

省二君は、その「補助」でした。本番の数日前、その役を言い渡された省二君は、

「俺は、ちゃんと毎日練習出たのに。」

「もう、体育祭なんてやる気ねえ。」

「たぶん、俺、乗るの下手だったからだよと思う。」

「そっか……。それにしてもねえ……」

けれど、先生方に「補助」という役割の大きな一崩れそうになった人を支え、タワーにバランスをとり戻す。落ちてしまった人を助ける――を説かれ納得したのか、愚痴を言ったのはそのたった一回だけでした。

その後、担任から連絡がありました。

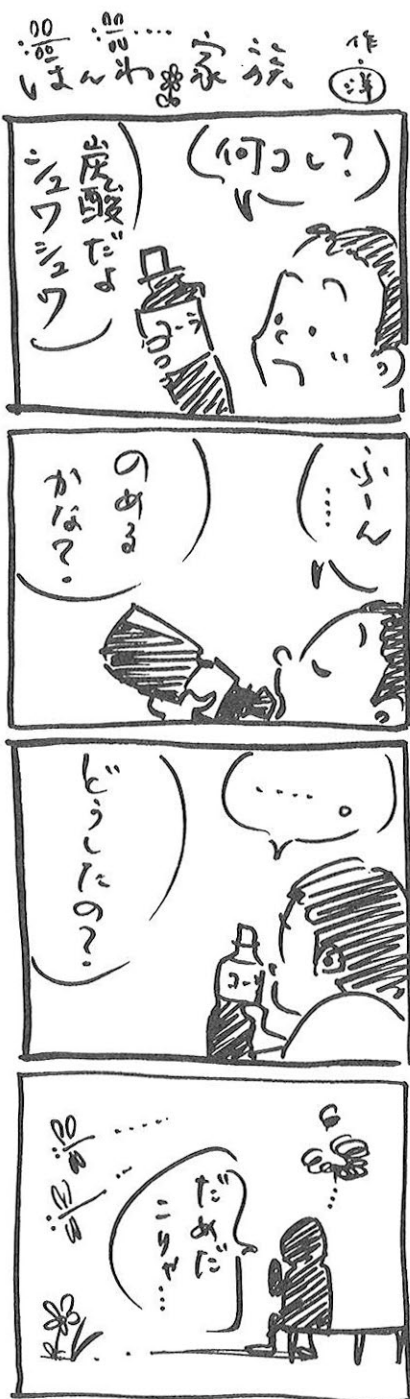
練習でタワーが崩れ、数名が落ちてしまったことがあったそうです。落ちた生徒に「大丈夫？」と声をかけたところ、次の言葉が返ってきたそうです。

「省二が下敷きになってくれたから、あいつが一番大変だったと思う。」

「省二君、立派でした。」

今年の運動会シーズン。私を最も励ましてくれたのは省二君です。人の注目を浴びないどころか、絶対やりたくないと思われてしまう役を一度は自身疎ましく思いながらも受け入れ、一生懸命努力し全うしようとする力を心から尊敬します。彼の、彼らの内なる力を……。

収穫の秋です。





来年度も 6月3日(土)に
バザーを行います。
引き続きバザー物品のご協力も
お願いいたします。
シワシワ...
先の子と家バザー実行委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2005年4月1日▶5月末日

2005年4月

幼児5名 小学生15名 中学生7名 高校生9名 措置外6名
計42名

- さくら咲き春風心地よく各家お花見行事へ
- 4日 江森理容店様散髪ご奉仕 感謝
- 5日 入進学祝い会 子どもまつり実行委員会実施
- 7日 大利根藤幼稚園理事長江森藤男氏ご逝去
田村様散髪ご奉仕 感謝
島田町長、栗原議員と施設長、副施設長が面会
- 8日 小学校・中学校・高等学校入学式
佐藤協子先生来訪職員のメンタルヘルスケア
- 9日 幼稚園入園式
- 11日 大利根藤幼稚園江森理事長通夜施設長、職員参列
- 12日 大利根藤幼稚園江森理事長告別式職員参列
- 17日～19日
北海道方面家庭訪問実施
- 26日 後援会、しずくの会の皆様とバザー打ち合わせ
- 27日～29日
九州 西南女学院大学にて菅原施設長講演

<4月の物品ご寄贈者>

篠原富男 大西黎子 杉山登志美 中島明美 中島助次郎
春山 中村久美子 坂本和歌子 川田久 宮内歯科医院
三国コカコーラボトリング株式会社 他多数の各位様

5月

- 4日 第20回子どもまつり 友人、教師を始め多くの方々と
交わりみんなの笑顔が天に届く
- 6日 佐藤協子先生来訪職員がカウンセリングを受ける
- 9日 後援会総会 原道小家庭訪問開始
- 11日 赤十字奉仕団・後援会による除草ご奉仕 感謝
- 14日 聖学院大学ボランティアワーク22名来訪
大利根藤幼稚園遠足宇都宮動物園へ
- 19日 大利根中学校との懇談会
- 26日 後援会総会 田村様散髪ご奉仕 感謝 日本社会事業
大学から学生15名が来訪、見学
- 28日 東小学校運動会 第77回理事会

<5月の物品ご寄贈者>

フラワーキャンドル事務局 瀬下 中島明美 杉山登志美 中
山久枝 古川景子 小早川典子 鳥越宏子 角尾和子 小林
川島由香 志賀絹江 豊国道江 根岸秀行 加藤操 梅沢義行
地域通貨フレンドリング協会 小野田喜代子 加須教会 三
和則雄 牛久保 梓沢あずさ 横村スミ子 花見槇子 渡部
稚子 有限会社光和堂 内田真奈 銀座ベンチャークラブ 梅
沢義一 南條喜三郎 新井摂子 宮崎晴子 松本静江 小野野
利子 飯野弥生 中島睦雄 東大宮教会 神林茶子 島崎なぎ
さ 斉藤米穀店 野本お茶店 野本百合子 他多数の各位様
感謝してご報告致します。(くら)

////// ———— 反 射 光 ———— =====

☆気候が狂いだしているといわれて久
しい☆朝夕のうそ寒さと日中の真夏日
との落差の中で職員や子どもたちが不
調を訴えています。がたいしたことな
く暮らしを紡いでおります☆今号は夏
休みの報告を皆様にお伝えします☆多
くの方々の善意を集め、きらめくよう
な思い出の夏休みが出来ました☆創立
の頃は壮年だった支援者の方々も七〇
代前後に達しておられ継続することの
大変さが年ごとに加わります☆この冬
光の子どもの家から里親に出た三歳児
が里親さんと一緒に訪ねて来られその
成長に驚き楽しいひとときを共にしま
した☆また児童養護施設が嬉しくない
新聞種になっています☆告発と報道☆
そして首の据え替えで済ますような貧
しさは願ひ下げにして、行政と児童養
護施設が真の意味で信頼を形成し連携
して子どもたちの利益をこそ追求すべ
きだろう☆そのための施設長会の工夫
と実行をこそ願ひます☆二〇周年の秋
を迎え、よりよい養育のあり方を更に
追求します☆乞う！ご支援を。(哲)